

----- † ----- † ----- † ----- † ----- † ----- † ----- † -----

ENDING PHASE

GM :さて、エンディングフェイズの前に皆さん生還するかどうか、^{じりつはんてい}自律判定をどうぞ。

桐子 : 判定するまでもありません。

GM : それでも [ロイスの数] D10 だけ減らさないとダメ (笑)。D ロイスの分は足さないでね。

桐子 : (ダイスを振って計算して) 59 まで減りました^{イエア} Yeah

秀真 : 「D ロイス : 生還者」は使わなくていいや。(ダイスを振る)最終侵食率 84 %。

さて、残るは“^{ジャーム化}向こう側”に片足突っ込んだ二人 ある意味ここからが自律判定の本番である。

GM : さ、危ない人たちのお時間です (笑)。

英達・譲 : (侵食率が特に高い二人組)。

GM : ええ ~、侵食率による経験点を無視するなら二倍振りが

英達・譲 : (即座に) 無視する無視するっ! (笑)

英達 : このままじゃ全部 10 出ても 99 以下にならないのでっ。とりあえず倍振りします (笑)。

譲 : 私、侵食率 131 % でロイス 5 つしかないんだよねえ。全部 6 が出ても還^{かえ}ってこれられない。

英達 : え、5 つでしょ? (笑) こっちは 150 % でロイス 4 つだよ (笑)。10 でも駄目なんだぞ (笑)。

.....そこで下を競ってどーする。

譲 : 私は還^{かえ}るぞおお (ダイスを振る)普通にいけたね。侵食率経験点放棄したけど (苦笑)。

英達 : (ダイスを振る) 10 20さんじゅうろく (笑&泣)。

GM : (爽やかに) え ~、今回の経験点全放棄でもう一度 [ロイスの数] D10 減らせませすよ (笑)。

譲 : あと 4 つで..... 14 て、大丈夫か ~ ?

GM : 微妙なトコだなあ (苦笑)。

桐子 : てか、幼馴染みを人に戻そうというのに、自分のはるか彼方に旅立ってどーするの (苦笑)。

譲 : ウェルカム永遠の世界か? (笑)さあ、“私”はいつでも門を開いて待っている! (笑)

誰だ、アンタ。

英達 : (ダイスを振る) じゅう.....きゅうっ (巻き起こる歓声&拍手)。結局 99ってことか。

GM : (目を剥く)すっげえギリギリ! まったく何だその、ヒヤヒヤさせる展開は! (笑)

譲 :さて、エンディングかな。

GM : うい。全員クリアしたようだし、順番にやっていきましょう。

自律判定 クライマックスで事態が収束したのち、エンディングに入る前にこの自律判定が挟まれる。これは事件に関わることによって上昇したレネゲイドの侵食率を下げるもので、この判定終了後に侵食率が 100 % を超えていた場合“ジャーム化”となり、以降その PC でプレイすることが出来なくなる。

生還者 レネゲイドに対する強い抵抗力を持っていることを示す D ロイス。自律判定の際に 3 個のダイスボーナスをつけることが出来るが、秀真のように使用しないという選択も無論、可能である。

ウェルカム永遠の世界 『聖夜に鳴る鐘』で永斗が言った言葉。ジャーム化を指しているらしい。

「あああ～うう……っ！」

夕方過ぎの編集部で桐子が悲鳴をあげていた。

内心で頭を抱えつつも、指先はしっかりキーボード上を踊っているところはさすがだ。

だが、狙っていた“Project Judgement”は潰れた 正確には潰した うえ、時間はない。

『火曜 17:00 〆切!!』 五日前に自分で書いた付箋が目に留まり、桐子は泣きなくなった。

GM：じゃあ、どんな感じにしますか？

桐子：(いきなりがっくりうなだれて)……デスクで……キーボードでも……打ってましよう……。

譲：(桐子の台詞を乗っ取って)原稿がああ～……埋まらないいい っ(涙)

桐子：ちなみに〆切まで、あと、30分です。

GM：じゃあ、そうやってカタカタ打っていると、^{デスク}上司からもらったメモがパサッと床に落ちるわけですよ。ゲーム“Project Judgement”について、Middle07で判明した情報が書かれた紙です。

桐子：うん。

GM：それがまだ机の上にあったみたいですね。……GMからの振りはそんなもんかな。

譲：(突然)咲島さんの名前って何だっけ？

GM：？ 綾華だけど？

譲：(桐子になって切なげな口調で)綾華 あなたのことは決して忘れな

GM・桐子：いやいやいやいやっ!?(爆笑)

桐子：(GMと同時に)おかしいからっ!(笑)

GM：(桐子と同時に)てゆーか生きてるからっ!!(笑)

英達：……殺さないで(涙)。パッドエンドになっちゃう!

譲：これでトゥルーエンドは私だなっ(笑)

確かに TRPG は皆が主人公になれる遊びだが、そんな主役の乗っ取り方はしないでいただきたい。

桐子：拾い上げながら、まあ無事に帰ってこられたし、よかったわねえ みたいな感じで……(ぎゅっと目をつぶって)「いいよいいよ～頑張るもんっ！」と言ってカタカタ打ちます(笑)

GM：じゃ、そこに仕事用の携帯がけたたましく鳴る というところでシーンエンドかな？

桐子：はい。それをお願いします。

「……いつまでも感傷に浸ってられないわよね、働けあたしっ！」

桐子は〆切を記した付箋を剥がすと、他の用済みの紙と共にぐしゃぐしゃと丸めた。

ついでに、さっき左手に拾い上げたメモも混ぜ込む。拳大になったそれをぼいっと投げた。

カコン、とゴミ箱に紙くずが落ちる音に携帯の着信音が重なる。仕事用に持たされているものだ。

「はいっ、第八編集部の宇佐美ですっ!!」 生きるための戦いは、続く。

あと、30分 どうも、TRPG プレイヤーには自ら PC を追い込んだり不利な状況になったりするの
好きな人や、嬉々として負けロールプレイをする人が多い気がするのだが、何故なのだろう……？

机の上に並んだ五枚の“死亡事故”調書。それを手でひとまとめに整え、席を立つ。
シュレッダーなら鑑識課の内部だけでも三台はあるが、秀真は別棟の交通課に向かうことにした。
また平穏な日常に還ってきたのだと思えば、使われてやるのも悪くはない、か。

秀真：次は俺か。特に何もねえな……交通課とか？

GM：ん なら、鑑識課かな。あなたの机の前ですね。上には、五枚の調書が並べられています。
「死亡事故」と書かれていた方ですね。複製ではなく、原本の方から抜き取ってきたものです。

秀真：……こいつら、皆アレか？ ゲームの中で、死んじゃったのか。

GM：うん。綾華以外は完全にジャーム化したうえ、死後だいぶ経ってから助けが来たからね。

秀真：やれやれ……。そんじゃ、シュレッダーにかけるか。

譲：ガシオン、ガシオンッ!! (電動式シュレッダーの稼働音)

GM：そんなうるさいのか! (笑) ツーか、こうじゃないの? (右手でハンドルを回す真似)

英達：きゅこきゅこきゅこ……。 (笑) (手動式シュレッダーの擬音)

桐子：100均のかよっ!?(爆笑)

失敬な。GMは1980円ぐらいのものを想定していたぞ。

桐子：……ふつう～、警察にはでっかいのがあるんじゃないかい? (苦笑) 業務用の。

GM：ウィーン、タタタタッ……って感じのね。それはともかく……どこでかけます? (笑)

秀真：あ?

GM：二択があるんですよ。交通課の資料室か、それ以外か、っていう(一同笑)。

秀真：……また手伝われるだけなら、交通課でいいや。

GM：いいんだ……。 (笑)

シュレッダーの前で待っている間。ぼうっとする秀真の脳裏に取り留めのない思考が広がる。

FHの陰謀にUGNの事後処理、どちらの後でもこいつは“間違っただけ”不要な過去……。
沈鬱な考えとは真逆の軽快な音と共に、最後の一枚が棄てられる過去たちの中へ落ちていった。

GM：じゃ、ちょうど全部の調書をかけ終わった頃にヤツが資料室に来るわけですよ。

譲：(同僚になって)よおう、鶴来い (ニヤリ)

桐子：(同じく同僚になって)おお～、手伝いに来てくれたのかぁ! (笑)

秀真：……………。

GM：片付けてない調書の山はまだまだいっぱいあるよ っって感じ……それでいいのか? (苦笑)

秀真：いいよ (笑)。

「いやぁ嬉しいねえ鶴来～。進んで手伝いに来てくれるなんて、俺はいい友を持ったっ!」

「……お前、喋ってないで仕事しろよなあ……だから全然片付かないんだ資料室は」

「まあまあ細かいこと気にしなさんなって。あ、眼え疲れたからちょっと外で煙草吸ってくるわ」

「お前のは眼じゃなくて、ただ喋り疲れたただけだろうがっ!!」

力いっぱい勝手なことを言う同僚にツッコみつつ、秀真は三冊目のバインダーを広げた。

Ending 03 去りし者に想いを馳せて

Scene Player 帆島 譲

譲は任務を終えた日はいつも、帰宅してすぐ入浴することになっている。

ひとりになり、緊張していた心身を緩め 身体にこびりついた“死”を、流せる気がするから。
.....だから、浴室は譲が感傷をさらけ出せる唯一の場所だった。

GM : (警戒しつつ) な、何か希望するエンディングはあるかな? (笑)

譲 : そうだなあ。じゃあ、夜の風呂場で「熊」.....終わったよ.....何もかも」とひとり言を呟く(笑)。
「.....お前を失ったのは痛いけど、私は新しい“熊”を手に入れた! これからは彼と共に歩むさ」

本人、とてもしんみりと語っているのだが.....周囲はその胡散臭さに必死に笑いを堪えていた。

譲 : で、天井からポチャンと雫が落ちて。「そうか、お前も分かってくれたか..... “熊”」

桐子 : 何でっ!? (一同笑)(堪えきれずにツッコんだ)

譲 : (突然活き活きした声で)「さあ、私には UGN の任務が明日からも待っている!」がちゃ。

一同 :

譲 :タオル忘れた! (一同笑)

何にでもオチをつけないと気が済まない男 その名は、帆島 譲。

恐るべきそのポケっぶりの破壊力は、この後三分ほど全員を笑い転げさせるほどであった。

GM : (声が震えている) “熊” に対するっ.....語りのために.....お、お墓.....に連れてくる予定だったのに、風呂場で.....っ! (笑) あっははは(爆笑)。っだ、駄目だあ苦しいっ.....! (爆笑)

譲 : 私ももう、何が何だか..... (ひとしきり葛藤した後で) こ、これでこそ、本・望!

GM :いや、凄いな(苦笑)。何でこうなるんだろ。シナリオのは全然違うシーンなのに(笑)。

「キミは支部長と墓前報告に来ていた。同僚の墓に手を合わせ、静かに祈りを捧げる」

実は これがシナリオにあった当初の想定案だったりするのだが。こんなにズレるとは.....。

譲 : どどどどんなの!? あの、今からはシナリオ通りにシーン作って欲しいっ! (一同爆笑)

GM : (爆笑しながら息も絶え絶えに) わ.....分かった.....っ(笑)。では、その前に。

* * *

同日、同刻。何処とも知れぬ場所。“彼女”が唇を噛んでいると、後ろから声がかかった。

「おやおや。ご自慢の実験体も連れ帰らずに複製体を使って逃げてきたばかり、というところか」
「フン.....いかに神と言えど、誤ることはある それだけよ」

「ほう、神.....か。だが洪水を起こしても、通達無視の結果、計画を阻止された失態は消えんぞ?」

「フ、もちろんそのくらい分かっている。長々と悪魔の失墜を見ていれば ね」

ひとしきり舌戦を終えると、それぞれ純白の服を身に纏った男と女は静かな睨み合いを始めた。

* * *

GM :というところで、譲に話を戻そう。それじゃ、翌日のF市支部かな。

譲 : 今日はぱりっとしたグレーのスーツに白のワイシャツを着て、白黒ストライプのネクタイで。

翌日。^{フェイト・インジケーター}“運命の導き手”は譲の姿に眼を留めると、少しだけしんみりした様子になる。

「その姿 仙台さんのための“喪服”ですか」譲が頷くと、二人はどちらからともなく瞑目した。

彼は人を救っていたから天国へ昇^{のぼ}ったのか、オーヴァードを殺していたから地獄へ墮^おちたのか。

それとも、そんなことを問うこと自体がナンセンスなのか。

^{めった}滅多に人には曝^{さら}さない感傷を振り払うと、譲は報告書のページをめくって口を開いた。

GM : 最後まで聞いた結希が「お疲れさまでした、“ケルティック・シャーマン” 帆島さん」と。

譲 :いえ。私は支部長.....(怪しい片言で)アナタのコトを信じておりマシタカラ(ニヤリ)

GM : (遠くを見ながら「の」の字を書きつつ)「ぶつぶつぶつぶつぶ.....」

譲 : (真顔に戻って)ところで、支部長。

「.....エート。その.....一名、新たにエージェントを雇うしたいのですが、その、スカウトを.....」

「確かに仙台さんの欠員が出て、あなたの相棒^{バディ}が空いていますからね。“見えざる神の手”の本体を追いかけるのにも人手が欲しいですし もし相手が承諾してくれるのなら、それもいいですね」

「いえ、あの交渉するだけでなく、出来れば確実にですね」

脳裏に浮かんだ少年は思いっきり首を横に振っていたが、構わず^{ちんじょう}陳情すると結希が苦笑する。

「あのですね、“ケルティック・シャーマン”.....それは、騙^{たま}す と言うんですよ、普通。

私は“運命の導き手”です。導き手は、運命をねじ曲げるようなことはしないんですよ」

そう、彼女が笑った五日後に 譲に新たな相棒^{バディ}の可能性を告げる電話がかかってくる。

だが、彼はそれをまだ知らない。

GM : 「もしもし、帆島さん? もしかしたら、新しいエージェントが加わるかも知れませんよ」

譲 : なら「ちなみに.....その、エージェント候補の名は.....」 っところシーンが切ろうか。

GM : 分かりました。

* * *

ちなみに。さすがに最初から最後までオチっ放しにも出来ないので編集しようとしたら、譲のエンディングシーンの八割方がカットになってしまったのは私とあなただけの秘密である。

Ending 04 “獣”と“罪人”の序曲^{オーヴァード}

Scene Player 花島田英達

はじめ、それは親戚^{しんせき}である桐子に判断が求められたが、彼女はそれを英達^{ゆだ}に委ねた。

『……咲島綾華さんはどうやら、非常に強いレネゲイド抗体^{こうたい}をお持ちのようです。
彼女なら、オーヴァードの力そのものをも“封印”することも出来るかも知れません』
それを聞いた英達は、迷わずひとつの選択肢を選んだ。 もう、“罪”を覚醒^{めざ}めさせないために。

GM：最後となる英達のエンディングには、綾華のジャーム化^{よくせい}抑制に絡んだ選択肢を用意しました。

英達：おう。

GM：主に彼女の記憶^{ほどこ}に施す処置についてですね。……次の三つがあります。

全ての記憶を消去して、オーヴァードとしての力も抑制する
ジャーム化した後の記憶は消して、オーヴァードとして覚醒したままにする
全ての記憶を残したうえで、オーヴァードとして覚醒したままにする

英達：(即座に)全部 の記憶を失わせて、オーヴァードの力も抑えてください。 番の処置で。

GM：(そうか、それを選んだか)……分かりました。では、病院でシーンは始まります。

「こんな立て続けに事故^おに遭うなんてなかなかないよね～。一生分の不幸がまとめてきた感じっ」
林檎^{りんご}をしゃくり、と噛んで 無邪気に綾華がそう言った。英達は内心の動揺を殺して、頷く。
「確かになかなかないのは認めるけど、不幸とかじゃなくて単にお前が不注意なだけだ」
「むっっ！ ぶ～……」ふくれながらぶつぶつ言う彼女に、ようやく英達が苦笑を見せた。

GM：胸の裂傷はほぼ完治してきて、退院まではいかなくとも一般病棟に移っています。

英達：なるほど。

譲：で、まあ病室の仕切りの向こうには、音楽を聴いている私が潜んでいたりするわけだが(笑)

英達：(とても嫌そうに)ええええ!?

登場はGMの許可を取ってからにしてください。ていうか、このシーンは駄目。

譲：ちえ……いたかったのに。

GM：この偏愛め(笑)。それはともかく、英達は見舞いに来ているという感じでいいのかな？

英達：搬送されるときもついて行ったし、見舞いに行くはずと付き添ってるんじゃないかな。

GM：ふむ。彼女は起きてるよ。何日か前に目覚めていて……そうだね、起きあがって歩行まではさすがに無理だけど、ベッドから上半身を起こすぐらいは出来るみたい。

英達：じゃ、談笑してるんじゃないでしょうか。

GM：なるほど。そうしていると、彼女は親に持ってきてもらった携帯ゲーム機を出して。

英達：……………格ゲーですか(苦笑)。

GM：そうそう(笑)。「英ちゃん英ちゃんっ。私、こないだも交通事故で入院してたし……このまま病院にいと腕がなまっちゃうから、やろ～よおっ！」と二台取り出すんですねえ(笑)。

英達：じゃあ……まったく、という顔をしながらもう一個の方を受け取るよ。

「ステージはぁ……ここでいっか 私は……今日は桃ちゃん使おっと。英ちゃんは？」

背景に見えた廃墟風の灰色に、女子高生のキャラ まるで“あのとき”を再現するかのような選択肢を屈託なく選ぶ綾華に胸が痛む。気が進まず、他のゲームを求めると首を振られた。

GM：「これしか袋に入っていないんだよねえ……あ、英ちゃんが買ってくれるんなら話は別だけど」

英達：(ため息をつきながら即答)分かったじゃあ明日、買ってくるよっ！(一同苦笑)

桐子：弱いなあぁ～(笑)

譲：(綾華を乗っ取って)じゃあ、明日はそれとして 今日はコレやるうね？(笑)

内心で泣きつつ、チャイナ服の女性を選ぶ。状況が同じなら、せめて“自分”は変えたかった。

「……あれ、珍しいね。英ちゃんが蹴りキャラ使うなんて……普段使わないのに」

「っ……、怪、我人相手にハンデつけてやろうって思いやりだ」

「あ、言ったな？ 覚悟しなさいよぉ～コテンパンにしたげるからね!？」

その日、面会時間終了まで個室の中は操作音が止むことはなかった。

* * *

最後に、翌日に英達が持っていったゲームが何かで盛り上がる一同。その結果……。

GM：ファンタジー系のRPGにしたのか(なるほど、現代風のを避けたんだな)

英達：うん。それを持って行って……「お前もたまには、格闘ゲームから離れる」って言って渡す。

「む……」期待と違う物を渡されてへそを曲げるかと思ったが……綾華は突然にぱっ、と笑った。

「まあいいや、英ちゃんがくれたソフトだし。やってみるね～」

GM：そう言って、ソフトを挿して 取り扱い説明書も読まずにやり始めます(笑)

英達：……多分、自分はもうやったゲームなので(横から覗き込みながら)「やっ違うから！ いや間違っ ちょっと説明書読もうよ!？」って言いながら二人でゲームをする(一同笑)

「えええ～いいじゃん、英ちゃんは分かってただし。ねえ英ちゃん、コレどうすんの～？」

「だから説明書読めよっ！」

小冊子を鼻先に突き出された綾華が黙って三秒。「えっ？ ……………説明書？」と英達を指す。

たっぶり一分はがっくりとうなだれてから、諦めて英達は画面を指さし、説明を始めた。

「……だからこれは だ～っ、格ゲーはすぐ覚えるのに、何でもここのは駄目なんだお前は!!」

「ええっ、もぉ～優しくないなあ英ちゃんは。もっと素直になろうよ～……やっば、夢だったのかな」

「……えっ？」

「ううん、何でもないっ！ ……で、ここはさぁ……」

そして“日常”はまた動き出す。

Double+Cross Replay 「Angelic Sin 無垢なる大罪」 Fin.